

テクノロジーと想像力

アンダースとヨナスにおける技術論の比較

戸谷 洋志

論文要旨

本稿の主題は、ギュンター・アンダース (Günther Anders 1902-1992) とハンス・ヨナス (Hans Jonas 1903-1993) の技術論を比較することである。両者は、ともにドイツ出身のユダヤ人であり、第二次世界大戦後に技術を哲学的な考察の対象としたことで知られている。両者の技術論は、テクノロジーの潜在的な危険性を指摘し、その克服の手がかりとして想像力を重視している点で、軌を同じくしている。先行研究において、こうした類似性が強調されるあまり、しばしば両者は同一視される傾向にある。しかし、アンダースによって説明される危機が、人間の諸能力の不調和に存するのに対して、ヨナスによって説明される危機は、科学技術文明における没価値的な存在論に存する。この違いは、想像力に対して期待される機能の相違をももたす。こうした観点から、本稿は、アンダースとヨナスの技術論を比較し、テクノロジーと想像力をめぐる両者の差異を明確化する。それによって、両者の思想をそれぞれ正しく解釈するための前提を準備し、テクノロジーをめぐる諸問題に対する解決策を検討することが、本稿の目的である。

キーワード【ギュンター・アンダース、ハンス・ヨナス、技術の哲学、想像力、核兵器】

1. はじめに

本稿の主題は、ともにドイツ出身のユダヤ系哲学者であるギュンター・アンダース (Günther Anders 1902-1992) とハンス・ヨナス (Hans Jonas 1903-1993) の技術論を比較し、ここからテクノロジーの諸問題を解決するための手がかりを得ることである。

20世紀の思想史においてアンダースとヨナスは極めて密接な関係にある。両者は、学生時代にともにフライブルグ大学に入学し、エトムント・フッサールの授業で出会うことになる。その後、ベルリン大学で開かれていたエドゥアルト・シュプランガーの授業で、偶然にも再会し、親交を深めるようになる。また、ヨナスはマールブルク大学へ移籍し、マルティン・ハイデガーのもとで哲学を学び始め、そこで後に政治思想家として活躍するハンナ・アーレントと出会い、無二の親友になる。そのアーレントは後にアンダースと結婚し、ヨナスはこの親友同士の結婚を祝福していた。アンダースはフッサールのもとで、またヨナスはハイデガーのもとで博士論文を執筆する。しかし、1933年にナチスが政権を掌握し、ドイツ

国内で反ユダヤ主義の機運が高まりを見せると、両者はともにドイツからの脱出を試みる。シオニズム運動に傾倒していたヨナスはイギリスを経由してパレスチナへ入植し、これに対してアンダースは左翼思想家としてパリへ亡命、その後さらにアメリカへと移住する。その最中でアーレントと離婚している。ヨナスはパレスチナでイギリス陸軍の兵士として従軍し、アンダースはアメリカで文筆活動を行う傍ら工場労働に勤しむ日々を送ることになる。第二次世界大戦が終了すると、ヨナスはカナダを経由してアメリカへ移住し、1949年にアンダースとの再会を果たしている。翌年、入れ替わるようにしてアンダースはウィーンへ移住し、彼はその地で生涯を過ごすことになる。両者はその後も親しい関係を保ち続け、しばしば手紙の交換をしていた。

思想の内容においても両者の関心は近い。アンダースとヨナス、あるいは二人を取り巻く関係者としてのハイデガーやアーレントは、ともに〈技術〉を哲学的考察の対象とし、特に人間が生きる世界と技術の関係を問い直そうとする点で、問題関心を共有している。そのなかでもアンダースとヨナスの共通点として注目し得るのは、両者がともにテクノロジーの危機に対する想像力の重要性を強調している、ということだ。両者は、テクノロジーによってもたらされる危機から人間の生を守るために、テクノロジーを科学的実証性に基づいて管理するだけでなく、人間がもつ自由な想像力を発揮して、問題解決のために動員しなければならない、と主張するのである。

こうした見解の一致のために、先行研究においてアンダースとヨナスの技術論はしばしば同一視される傾向にあり、十分な比較検討が行われてこなかった。これに対して、両者の比較を通じて、それぞれの思想の相違点を浮き彫りにし、それによって両者の思想を正しく解釈するための前提を用意することが、本稿の課題である。それは現代思想における〈技術の哲学〉の系譜に新しい光を投じることにもなるだろう。さらにそうした分析によって、依然として人類全体の懸案事項として重くのしかかり続けているテクノロジーの諸問題に対して、哲学の観点から解決策の手がかりを得ることが、本稿の目的である。

本稿は次のような手順で考察を進めていく。まず、先行研究における代表的見解として Liessmann の比較研究を取り上げ、その論点を分析する (2)。次いで、アンダースの技術論と (3)、ヨナスの技術論を (4) それぞれ検討し、両者を比較検討する (5)。最後に本稿の結論を述べる (6)。

2. 問題設定——先行研究におけるアンダースとヨナスの比較

先行研究において、アンダースとヨナスの哲学はしばしば同一視され、あるいは同様の問題に対して同様の回答をやや異なる観点から与えるものとして解釈されてきた。そうした例としては、比較的初期の Ben Gershon による研究¹⁾が挙げられる他、テクノロジーによって

もたらされる破局のあり方に注目した Dries による研究²⁾や、さらに想像力の役割に焦点を当てる Kureck による研究³⁾が挙げられる。これらはいずれも、アンダースとヨナスの思想的な類縁性を指摘しているという意味では有意義であるが、両者を比較検討できているとはいえない。そうしたなかで、両者の比較として高い水準を示しているのが Liessmann による研究である。Liessmann は、主にアンダースの研究者として知られ、特に 90 年代以降のアンダース研究を牽引する存在として評価されており⁴⁾、ヨナスとの比較の精緻さにおいても多くの先行研究とは一線を画している。以下では、Liessmann による比較研究の成果を概観することから、本稿の議論を開始していこう。

まず、Liessmann による問題設定を確認する。彼は次のように述べている。

ギュンター・アンダースとハンス・ヨナスの思想のうちに強い親和性を見いだすことは可能である。しかしまた、いくつかの違いもある。両者の関係においては、二つのテーマが決定的であるように思える。この二人の哲学者は、非常に強い意味で、人類が自己破滅的なテクノロジーの能力を有する、という状況に対して、人類の存続をめぐる問いに関心をもっていた。また両者はともに、差し迫った仕方、アウシュヴィッツが、人間の思考と行為の方法にとつてだけでなく、宗教的な意識に対してもたらず帰結についても論じている。同一の、あるいはよく似た出発点と経験を共有するに関わらず、ハンス・ヨナスとギュンター・アンダースがこの二つの問いに対して提示する答えは、これ以上には不可能なくらいに、異なっている⁵⁾。

ここで示されている Liessmann の問題設定は次のように整理される。まず、アンダースとヨナスはともに「人類が自己破滅的なテクノロジーの能力を有する、という状況」を問題の出発点として位置づけている。その上で両者は、この状況から喚起される二つの異なる問い、すなわち第一に「人類の存続をめぐる問い」と、第二に「アウシュヴィッツが〔…中略…〕宗教的な意識に対してもたらず帰結」とに対して、主題的な検討を行っている。前者は倫理的な問題であり、後者は宗教的な問題である。そして、この二つの問いに対する両者の回答はそれぞれ「これ以上には不可能なくらいに、異なっている」。こうした解釈に基づいて、Liessmann は次のように問題を提起する。すなわち、何故アンダースとヨナスは、テクノロジーの危機という共通の問題を出発点にしながら、まったく異なる主張をするに至ったか、ということだ。ここで両者が共有するテクノロジーへの危機意識は、次のようにも述べられている。

ヨナスもアンダースも、次のような想定から議論を開始している。すなわち、科学技術による自然の支配という、破滅へ向かう傾向を顧みる限り、またなにより、人類が自ら

所有する核の兵器庫によって自己破滅を招きうる、という可能性を顧みる限り、人類の利害関心のうちに行為を基礎づけるために、伝統的な哲学の道徳概念はもはや十分ではありえない、ということだ⁶⁾。

ここでは、前の引用において「自己破滅的」と呼ばれていたテクノロジーの危機的性格が「核の兵器庫」というより具体的な比喩によって表現されている。その上で Liessmann は、倫理的および宗教的な問題に対するアンダースとヨナスの見解の差異を、次のように整理している。

第一に、倫理的な問題に関して、ヨナスは、人類の存続への責任を定言命法の形で表現しており、新しい倫理の存在論的な基礎付けを試みている。これは、道徳的な責任の根拠を、責任の対象となる存在そのものによって基礎付けようとするアプローチである。これに対してアンダースは、そうしたアプローチに対して一貫して批判的であり、当為を存在において基礎付けることの限界を指摘している。その限りにおいて、倫理的な問題に関する両者の見解は鋭く対立する。しかし、それはアンダースが倫理を軽視し、まったくのニヒリズムに陥っていたということの意味するわけではない。アンダースは、現代において道徳そのものが技術的装置によって制御されているものの、テクノロジーに対する人間の主権性を保つことによって、人間の自由と可能性は維持されうると主張する。その上で、単に無批判にテクノロジーへと身を委ねるのではなく、自分自身の可能性と両立しうる行為の格律を獲得することが重要であると指摘する。その限りで「両者は、たとえ人類の存続の基礎づけの可能性への問いに関して、明らかに区別されるのだとしても、地上における人間の生命の存続をめざす倫理学の試みに関しては、一貫して意見の一致を保持しうる」⁷⁾と、Liessmann は解釈している。

第二に宗教的な問題に関して、アンダースとヨナスは、ともにユダヤ人として第二次世界大戦中に反ユダヤ主義の危機にさらされ、アウシュヴィッツ強制収容所の脅威を目の当たりにした、という体験を共有している。そしてその体験は、現代社会における倫理を考察する際に、アウシュヴィッツという出来事と神への信仰はいかにして両立するのか、という問いへと両者を直面させることになった。アンダースはこの問いをめぐって、歴史においてアウシュヴィッツという出来事の発生を許した以上、神は善なるものではないし、知性的な存在でもない、したがってそうした神はそもそも存在しない、と結論づけ、無神論の立場をとる。これに対してヨナスは、ユダヤ教における伝統的な神の概念から、全能性をあえて排除することで、無力な神という新しい神の概念を提案する。この神概念に立脚すれば、神は善なるものであり、また知性的でもあるが、しかし無力であったために、アウシュヴィッツの生起を妨げることができなかつた、という説明が可能になり、アウシュヴィッツ以降にも神の善性と知性を擁護することができる。こうしたヨナスの試みは、アンダースとは異なり、あく

までも神への信仰の可能性を残すための神学的な試みとして理解される。Liessmann は以上のような整理に基づいて、宗教的な問題に関して両者はより著しい対立を示している、と解釈している⁸⁾。

こうした Liessmann の研究は、しばしば同一視されるアンダースとヨナスの間に、共通の問題関心を認めながらも、鋭いコントラストを示す見解の対立を見出し、またその意味にまで踏み込んでいる点で、優れている。しかし、そこにまったく疑問の余地がないわけではない。というのも Liessmann は、テクノロジーに対する危機意識をめぐってはアンダースとヨナスを同一視しているからだ。もちろん、両者の技術論の間に少しの差異もないと明言されているわけではないが、少なくとも、そうした差異の可能性は主題的に検討されないままになっている。しかし、後述するように、両者の技術論の最大の相違点はまさにこの危機意識の違いのうちに存している。

以下では、両者の技術論を比較し、その間にある差異を明確化するための準備として、それぞれの技術論を概観していこう。

3. アンダースの技術論

アンダースの技術論は、技術そのものの本性を主題化するのではなく、むしろ技術と人間の関係をめぐって、特に技術に対する人間の有限性をめぐって議論を展開していく点に特徴をもつ。アンダースに拠れば、現代社会における科学技術の進歩は、技術的な製品の革新を意味するだけではなく、そうした製品に取り囲まれながら生きる人間の「魂」⁹⁾の変化をも意味している。しかし、そうであるにも関わらず、そうした魂の変化は技術的な製品の革新に追いついていくことができない。進歩を続ける科学技術文明のなかで「私たちは時代おくれを後ろめたく感じながらノロノロ歩みつづけるか、狂った恐竜のように、装置の間をうろつき回っているだけである」¹⁰⁾。これが、アンダースの主著『時代遅れの人間』の表題の由来であり、同時に、同書によって提起される根本的な主張である。そして、技術の進歩に対して必然的に「時代遅れ」であるという意味での人間の有限性を、アンダースは「プロメテウスの落差」として表現する。

自分が造った製品の世界と人間との間の非一同調性が日々増加している事実、両者の隔たりが日毎に大きくなる事実、これを「プロメテウスの落差」と呼ぶことにしよう¹¹⁾。

ここでいう「製品の世界」は、人間から切り離され、独立に存在する別の領域として解釈されるべきではない。何故なら、人間にとってその世界は「自分が作った」ものであるからだ。そうである以上、「プロメテウスの落差」とは、人間とその外界との間の「落差」なの

ではなく、むしろ、人間がもちあわせる能力の間の「落差」として、つまり、技術的な製品を製作する能力と、その「製品の世界」に対応する能力との間の「落差」として解釈されなければならない。言い換えるなら、この「落差」は、人間の諸能力の非統合性を示しているのである。アンダースは次のように主張している。

あらゆる能力には量と程度との特有の関係がある。「容量」「感度」「性能」「射程」がそれぞれに異なる。たとえば今日、大都市の破壊は、簡単に計画され、私たちが作った破壊手段で実行される。しかし、その結果を想像し、把握することはごく不十分にしかできない。——それにもかかわらず、想像できる煙や炎、残骸の曖昧なイメージは、破壊された都市を考えて感じられ、責任を負えるものの少なさに比べれば、それでもなお非常に多い。——あらゆる能力には性能の限界があつて、それを超えると働かなかつたり、変化を認められなくなつたりする。諸能力の射程は完全に一致するものではない¹²⁾。

ここでアンダースは、大都市を破壊するために、「計画」し、「破壊手段」を作り、破壊を「実行」するということと、その結果を「想像」することと、さらにそこから何かを「感じ」、その結果に対して「責任」を負うこととの間に、「射程」の不一致を見いだす。つまり人間は、大都市の破壊に対して十分な想像力をもつことができないにも関わらず、これを計画し実行することは比較的容易にできてしまう。この意味において、ある技術を生産する能力と、これを想像する能力との間には「プロメテウスの落差」が開かれている。だからこそ、人間には自らの想像力の閾値を超えたものを技術的に製作することができる。しかしその場合、人間の想像力はその産物に対して「働かなかつたり、変化を認められなくなつたりする」。そうした「落差」を克明に示す技術的製品としてアンダースによって挙げられるものが、核兵器である。アンダースに拠れば、人間は「水素爆弾を製造することはできるが、自分が製造したのものもたらす結果をまざまざと思い描く力はない。——同様に感情も行為におくれをとっており、何十万回も爆弾で破壊することはできても、死者を悼んだり後悔したりすることはできない¹³⁾」。その理由は、人間の想像力を超えるほどに、核兵器があまりにも巨大な威力をもつテクノロジーであるからだ。

「プロメテウスの落差」から導き出される論理的な帰結は、核兵器のような、人類を破壊されうる威力をもった技術的産物に対して、人間がふさわしい想像力をもてない、ということである。それは同時に、そうした破局に対して必要な危機感を人間がもてなくなる、つまり何も感じなくなる、ということの意味する。アンダースは、技術的製品によつてもたらされる破局に対するそうした感受性の欠落を、「アポカリプス不感症¹⁴⁾」と呼ぶ。それは、これから起きうる破局に対して十分な準備が講じられなくなり、そもそもそうした破局が起きるといふ可能性に対して人間が無関心になる、ということを含意する。そうである以上、

「アポカリプス不感症」に陥いることで、人類の破局のリスクは一層高まっていくことになる。

こうした状況を打開するためにアンダースが提示するのは、次のような解決策だ。すなわち、技術的な生産能力と想像力との間にある「落差」を埋めるために、想像力を意図的に拡張し、両者の間にふさわしい均衡状態をつくるということである。アンダースは次のように述べている。

事態がこうである以上、すべてが消え去ってはならないとすれば、今日の重要な道徳的課題は、道徳的想像力を形成すること、すなわち、「落差」を克服して、想像力と感情の能力や可塑性を、私たち自身の所産の規模や、私たちが引き起こしうるものを見渡しがたいスケールに合わせ、想像力と感情を有する者を製作者である私たちと統合しようとする試みにあるのだ¹⁵⁾。

「道徳的想像力を形成すること」とは、何でもないように見える技術的製品について、それがもたらしうる破壊力や破局を「誇張」しながら表現し、あるいは想像することを意味する¹⁶⁾。それは、科学的な実証性や数値化されたデータだけに基づいて技術的製品を捉えるのではなく、同時に、文学的・芸術的な想像力をそうした製品の理解へと積極的に取り入れていく、ということの意味する。それによって、「アポカリプス不感症」は解消され、そうした想像力を発揮しなかったならば講じられなかったような対策を講じ、破局の到来を先延ばしにする可能性が開かれる。このような意味で、想像力の拡張は未来の破局の防止に役立つのだ。こうした観点から、「道徳的想像力」は「予見的解釈学」¹⁷⁾とも呼称されている。以上のような仕方では、アンダースは科学技術文明における想像力の重要性を主張するのである¹⁸⁾。

4. ヨナスの技術論

アンダースが技術と人間の関係から議論を展開するのに対して、ヨナスは、近代的な技術の成立に遡ることから議論を展開していく。ヨナスに拠れば、近代以前の技術は、手仕事の道具に代表される通り、ある特定の目的をもち、その目的のための手段として性格づけられていた。その際、目的は技術に対して限界を与え、技術がこの限界を超えて進歩することはなかった。これに対して、近代以降になると、技術はそうした限界から解放され、「動因が生じた場合、進歩の可能性はあらゆる方向へとさらに歩みを進め」¹⁹⁾、どこまでも無際限に進歩するようになる。こうした観点から、ヨナスは近代的な技術を進歩のイデオロギーに透徹されたものとして性格づけている。

ヨナスに拠れば、テクノロジーによって示される無限の進歩への衝動を動機付けているのは、技術と科学との構造的な連関に他ならない。17世紀以降に勃興した実証的な自然科学において、科学的な学説は理論だけでなく実験による証明を要求されるようになった。言うまでもなく、実験は道具と装置によって構成される一つの技術的な営為である。したがって、科学と技術は不可分に結合することになり、科学の進歩は技術の進歩と歩みを同じくすることになる。ヨナスは、ここにテクノロジーのもつ進歩の無限性の根拠を見だし、次のように指摘している。

科学は、その固有の理論的な目的のために、精密さを増していく物理的に強力なテクノロジーを、自らの道具として使用する。科学は、この道具を自ら生産し、そして、技術に注文するのである。科学がテクノロジーの支援によって発見するものは、実践的な領域における新しい出発点になる。そして、この出発点は全体において、言い換えるなら、作用を及ぼすテクノロジーはこの世界において、その経験によって、今度は科学に対してより巨大な実験室を提供し、また、科学にとって新しい問いの温床を提供する——そのようにして、無限の円環が続くのである²⁰⁾。

科学が技術の力を借りて新しい「発見」をもたらすと、その知見が応用されて「実践的な領域における新しい出発点」になり、それによって新しい技術が開発される。この新しい技術は、今度は翻って、科学に対してより高度な実験設備を提供し、「新しい問いの温床を提供する」。このように、科学の進歩は技術の進歩を引き起こし、技術の進歩が科学の進歩を引き起こすのであり、両者の進歩は「無限の円環」のなかで繰り返されることになる。ヨナスに拠れば、科学と技術は「相互的なフィードバック関係」によって結ばれており、「科学とテクノロジーは共に生きることしかできないのであり、さもなければ、共に死ななければならない」²¹⁾のである。

以上のように、科学が技術と癒合するということは、両者が同様の存在論を共有するということを意味する。ヨナスに拠れば、その存在論を特徴付けているのは、人間が恣意的に構成する主観的な領域と、科学が対象とする客観的な事物の領域を二分した上で、価値に関する概念を主観的な領域だけに帰属させ、客観的な領域に価値概念を認めない、という没価値的な存在解釈である²²⁾。この存在論において、事物はそれ自体において没価値的なものとして理解される。ただしそれは、事物の価値がより低くなる、ということではなく、むしろ、事物に対する価値の評価自体が不可能になる、ということの意味する。そうである以上、人間が主観的に抱く価値観に対して、客観的にその是非を裁可する倫理的な基準は存在しない。ヨナスは、そうした事態を如実に示す典型例として原子爆弾を取り上げ、次のように述べている。

原子爆弾の発明がもたらす破壊力の増大を嘆くことはできる。しかしその嘆きはまさに、原子爆弾が技術的には「よりよい」ものであり、その意味で残念ながらその発明が進歩である、という事実に対する嘆きなのである²³⁾。

ヨナスに抛れば、原子爆弾を事物それ自体として倫理的に裁可する基準は存在しない。その目的が効果的な大量虐殺であるのだとしたら、原子爆弾はより進歩した望ましいテクノロジー以外の何ものでもない、ということになってしまう。そうした没価値的なテクノロジーが人間の生きる世界を覆っていく時代を、つまり科学技術文明の時代を、ヨナスは「倫理の空白」²⁴⁾と呼んでいる。

テクノロジーは、没価値的な存在論に立脚するにも関わらず、進歩のイデオロギーによって透徹され、その影響力を瞬く間に拡大させていく。ヨナスに抛れば、「技術的な能力の使用は、それが何であつたとしても、社会によって（ここではもはや個人は数えられない）、より『巨大なもの』へと成長していく傾向をもつ」のであり、そうした「技術の集積的な影響は、場合によっては、無数の未来の世代にまで及んでいく」²⁵⁾。その際、「集積的な影響」として考えられているものには平凡で日常的な技術も含まれる。たとえばディーゼル自動車に乗ることは、原子爆弾のように直接的な被害をもたらすことはないが、それが集団的に利用されることで、環境破壊を招き、遠い未来においてその「集積的な影響」を甚大な被害として引き起こしうる。科学技術文明の倫理的問題としてヨナスがもっとも懸念するのは、現在において倫理的な反省を経ることなく用いられている技術が、その副作用を蓄積していくことで、間接的な形で、未来において予測不能な被害を生じさせる、という事態に他ならないのである。

この問題を解決するための方途として、ヨナスはアンダースと同様に、想像力の重要性を指摘している。ただし、ヨナスにおいて特に重視されるのは、意図的に恐怖を喚起させる想像力である。ヨナスはそうした想像力の使用方法を「恐怖に基づく発見術」²⁶⁾と名付け、次のように述べている。

予見された人間性の歪みが、はじめて、その歪みを前にして守られるべき人間性の概念を、私たちに取得させる。賭けられているものが何であるかを、私たちがはじめて知るのは、それが賭けられているという事実を私たちが知るときである²⁷⁾。

自明な言葉がほとんど得られていない領域では、そうした言葉を探ることが義務となる。その際には、恐怖を導きとすることが是非とも必要である。私たちが求めている「未来倫理」の場合、恐怖すべきものはまだ経験されていないし、その類似物すら、過去の経

験にも現在の経験にも見つけ出されないからだ。したがって、イメージによって現実の先を行く思考を獲得することが、ここで求められている倫理学の第一の義務、いわば導入としての義務になる²⁸⁾。

「恐怖に基づく発見術」において期待されているのは、第一に、「守られるべき人間像」を顕在化させることであり、第二に、「イメージによって現実の先を行く思考」を通じて、科学的な実証性に囚われることなく未来の破局を予測することである。前者は倫理的な価値に関する思慮を喚起し、後者はテクノロジーによる予測不能な影響に関する思慮を喚起するものとして解釈される。こうした想像力の行使によって、「倫理の空白」に蝕まれていく科学技術文明のなかに、反省的な倫理的思索の可能性を開くことが、ヨナスの技術論における想像力の機能に他ならない。また、そうした想像力の実践として、ヨナスはSF文学の重要性が指摘している。

5. 比較考察——テクノロジーと想像力

以上において、アンダースとヨナスの技術論をそれぞれ検討してきた。その上で、以下では両者の比較を行う。

Liessmann が指摘する通り、両者の技術論は「強い親和性」を示している。そうした親和的な点としては次の二つを挙げることができる。すなわち、第一に、両者の技術論はともにテクノロジーを本質的に人間にとって危機的なものと見なしている、ということであり、第二に、そうした危機に対する抵抗として想像力の重要性が強調されている、ということだ。前者に関して、両者はともに、個別のテクノロジーの危険性を主張するのではなく、そうしたテクノロジーを成り立たせている人間の技術的な営為そのもののうちに、原理的な水準で危険性の根拠を見出そうとする。また、後者に関して、両者はともに、テクノロジーがもたらす未来への影響を科学的実証性に基づいて認知することの限界を指摘し、これに対して、文学的な想像力による理解の必要性を主張する。その限りにおいて、Liessmann を始めとして、多くの先行研究が両者の技術論をほとんど同一視しているのだとしても、理由のないことではない。

しかし、より詳細に検討するならば、両者の技術論の間には決して看過することのできない違いもある。

第一に、テクノロジーの危機的な性格に関して、アンダースがその象徴的な例として挙げるものが核兵器による破局であるのに対して、ヨナスが挙げるそれは環境破壊などによる破局である。アンダースにとってテクノロジーがもたらす破局は、直接的な破壊力によって人類が死滅するという事態であるが、ヨナスにとってそれは、平和で有益に見えるテクノロジー

一の副作用によって、間接的に人類の存続が脅かされるという事態である。もちろん、前述の通り、ヨナスもまた核兵器に注目してはいるものの、それはそれが科学技術文明における「倫理の空白」をもっとも明瞭にするテクノロジーである限りにおいてのみであって、それ以上の特権的な扱いを受けているわけではない。そうである以上、両者の間には、テクノロジーの危機に対する根本的な見解の違いがある。その違いに自覚的であったヨナスは、自身の技術論とアンダースのそれを対照させて、次のように論じている。

私はギュンター・アンダースを学生時代にギュンター・シュテルンとして知り、仲良くなり、それ以降も親交をもっていた。彼は原子爆弾に衝撃を受け、そしてここに存する破局的な脅威が彼自身の哲学的営為の転回点だった。そのときから、彼はこうしたテーマに専念し、心を奪われてしまったのである。私にとっては、原子爆弾による破局的な脅威は、それほどまでに心を揺さぶられるものではまったくなかった²⁹⁾。

テクノロジーに関して私を驚愕させたのは、原子力ではなく、あまりにも普通で、平和的で、利潤・享楽・快適・生活の美化・負担の軽減へと方向付けられた技術の使用が、誰からも意図されていないにも関わらず、しかし不可避であるような副作用によって、明らかにするような事態だった³⁰⁾。

前述の通り、ヨナスは「原子爆弾」を、「倫理の空白」を顕著に示す例として捉えている。しかし同時に、それが危険性を顕著に示す以上、特別な哲学的思慮を必要とすることなく、国際社会はその削減へと進むことができる、とも主張している³¹⁾。これに対して、本当に危険な事態としてヨナスによって理解されているのは、その危険性が決して自明ではないようなテクノロジーの使用に他ならない。ヨナスは、そうした認知不能な「副作用」を伴うテクノロジーを、「原子爆弾」に対して「時限爆弾」と表現している。「時限爆弾は、私たちが、西洋の技術文明の一員として行動する様式で、またそこで私たち全員が協働するようにして、単に生活を送っている間に、時針を進めていく」³²⁾。

こうしたテクノロジーの危険性に対する解釈の相違は、それに対応して要請される想像力の機能に関しても、相違点を生み出す。アンダースが「道徳的想像力」という概念によって示すのは、想像力を意図的に拡張することによって、人間の製作能力と想像力との隔たりを埋め、テクノロジーがもたらしうる未来を理解できるようにすることだ。そこで期待されているのは、破壊力の理解であり、破局的な事態の理解である。これに対してヨナスが「恐怖に基づく発見術」という概念によって示すのは、テクノロジーによって引き起こされうる恐怖すべき事態を想像することで、その破局から守られるべき人間像を発見することである。そこで期待されているのは、人間像の理解であり、規範的な理念の理解に他ならない。アン

ダースが想像力によって克服しようとするのが、「プロメテウスの落差」、すなわち人間の諸能力の間の不均衡であるのに対して、ヨナスが想像力によって克服しようとするのは、「倫理の空白」、すなわち没価値的な存在論に他ならない。

こうした両者の相違点はそれぞれの技術論を互いに次のように逆照射する。まずアンダースの技術論は、人間の諸能力の不調和を指摘するものでありながら、その不調和が解消されるべきである、という規範の基礎づけを行っていない。また、その不調和の解消を担う想像力は、「道徳的想像力」と名付けられているにも関わらず、あくまでもテクノロジーが使用された結末を想像する能力であって、その限りにおいて、事実的な認知を助けるものであり、規範的な実践を促すものではない。一方、ヨナスの技術論は、人間がテクノロジーの行使によってもたらされる結末を想像できることを前提にしている。もちろん、未来においてテクノロジーがどのように発展するかは認知不可能であり、その限りにおいて、想像力の行使が要請されているが、少なくとも現在において存在するテクノロジーの威力は認知可能であると考えられている。特に、核兵器の問題を国際協調によって解決できるとする見解は、アンダースの立場からすれば到底受け入れられるものではなく、両者の決定的な相違点であるといえる。

もっともアンダース自身は戦後の反核運動に身を投じており、決して規範的な実践に無関心であったわけではない。しかし、Liessmann が指摘する通り、少なくとも彼は規範の基礎づけに関しては消極的な態度を示しており、核廃絶の運動もまた、それ自体で基礎づけられる規範というよりも、むしろ一つの「反抗」としてのみ捉えられていた³³⁾。言い換えるなら、「道徳的想像力」の実践は、あくまでも人類の存続のために「反抗」を図る者にとってのみ有用な手段であって、それ自体が普遍的な妥当性を有しているわけではない。これに対して、ヨナスの「恐怖に基づく発見術」は、責任原理のうちに組み込まれた、普遍的な妥当性と有することを期待された方法である。こうした両者の観点の違いは、前述の「2」で述べられた、存在と当為の関係をめぐる両者の見解の違いを反映するものである。

以上のように、アンダースとヨナスの技術論は、その内容を子細に検討する限り、いくつかの論点で対立する立場にある。こうした違いに注目するなら、アンダースとヨナスの技術論を素朴に同一視することは、両者の解釈として不正確である、と判断せざるをえない。

6. おわりに

以上の議論を次のように要約して、本稿の結論としたい。

テクノロジーの危険性に警鐘を鳴らしたアンダースとヨナスの技術論は、先行研究においてしばしば同一視される傾向にある。実際、両者はともにテクノロジーのもたらす危機を克服するために想像力を重視する点で軌を同じくしている。しかしそれは、両者の間にいかな

る差異も存在しない、ということの意味するのではない。本稿は、そうした差異を明らかにするために、両者の技術論を比較考察した。アンダースにおいて、テクノロジーによってもたらされる危機の根源は人間の生産能力と想像力の乖離として捉えられ、これを克服するために想像力に求められる役割は、人間が生産したものの破壊力を意図的に誇張して表象させることである。これに対し、ヨナスにおいて、テクノロジーによってもたらされる危機の根源は没価値的な存在論として捉えられ、これを克服するために想像力に求められる役割は、危機から守られるべき人間のあり方を規範的な理念として表象させると同時に、これを脅かす遠い未来の破局を表象させることである。こうした差異に注目する限り、両者の技術論を同一視することは、両者の解釈として正確ではない。

以上のような比較考量から、原子力をはじめとするテクノロジーに対して、少なくとも次のような解決策の提案をすることは可能だろう。テクノロジーの問題への対処には、科学的な実証性だけでなく、人間の想像力の動員が必要である。ただしそのとき、想像力の機能には二つが区分されなければならない。第一に、テクノロジーがもたらす破壊力の理解を促進することであり、第二に、テクノロジーによって脅かされる人間像の理解を促進することである。前者はアンダースの思想から、後者はヨナスの思想から導き出されるものだ。テクノロジーに対する倫理的な対処を考える際、こうした想像力の機能の二重性の自覚は、現実的な方針の策定においても有意であろう。これを本稿の結論として提示し、本稿はここで筆を置く。

注

- 1) vgl. BenGershom (1983)
- 2) vgl. Dries (2008)
- 3) vgl. Kurreck (1994)
- 4) 渡名喜は、特にアンダースの先行研究における Liessmann の業績を高く評価している。渡名喜に拠れば、「1990年に——この日付が「チェルノブイリの後」だというもけっして偶然ではあるまい——、その後アンダース研究をリードすることになるコンラート・パウル・リースマンがウィーンで主催したギュンター・アンダースをめぐるシンポジウム」(渡名喜 (2013) p. 168) によってフランスにおけるアンダース研究が本格的に開始され、またその論集である *Günther Anders kontrovers*、さらに「やはりリースマンが主導的な役を担っている Text + Kritik, vol. 115, 1992 のアンダース特集号および Elke Schubert, Günther Anders: mit Selbstzeugnissen und Bilddokumenten, Rowohlt, 1992」は、アンダース研究の「基礎文献」としての地位を占めている(前掲書 p. 170)。
- 5) Liesmann (2003) S. 55= (2008) p. 133
- 6) ebd. S. 56=ibid. p. 134
- 7) ebd. S. 63=ibid. p. 141
- 8) vgl. ebd. SS. 63-68=cf. ibid. pp. 141-146
- 9) Anders (2010) S. 15= (1994a) p. 16

- 10) ebd. S. 16=ibid. p. 17
- 11) ebd. S. 16=ibid. p. 17
- 12) ebd. S. 267=ibid. p. 280
- 13) ebd. S. 17=ibid. pp. 17-18
- 14) ebd. S. 233=ibid. p. 235
- 15) ebd. S. 273=ibid. p. 286
- 16) ebd. S. 19=ibid. p. 20
- 17) Anders (2013) S. 424= (1994 b) p. 473
- 18) 科学技術文明における想像力に関するアンダースの議論は、前期と後期とでやや異なる様相を呈している。前期においては、本稿が示しているように、技術的製品とそれに対する想像力の間「プロメテウスの落差」が開かれ、人間はその製品に追従せざるをえない、という状況が論じられた。これに対して、最晩年の「言語と終末」というエッセイでは次のように述べられている。「私は十数年前に、不十分であり続ける私たちの〈表象〉と、私たちが〈製作〉するものの巨大な規模との間にある不一致を、〈プロメテウスの落差〉と名づけたが、明らかに、それだけが存在するわけではない。むしろ、後手を取り続ける言語と、私たちの〈作品〉の巨大さとの間にも、落差があるのだ」(Anders (1990) S.19)。ここでは、「プロメテウスの落差」として論じられた人間の諸能力の不調和が、科学技術文明に固有の問題ではなく、むしろ言語と製作行為一般の間を開かれる「落差」へと拡張されている、という変化が示されている。
- 19) Jonas (1987) S. 19
- 20) ebd. S. 27
- 21) ebd. SS. 27-28
- 22) ebd. S. 81
- 23) Jonas (1979) S. 295= (2000) p. 286
- 24) ebd. S. 57=ibid. p. 40
- 25) Jonas (1987) S. 45
- 26) Jonas (1979) S. 8= (2000) p. iv
- 27) ebd. S. 8=ibid. p. iv
- 28) ebd. S. 64=ibid. p. 51
- 29) Jonas (1991) S. 107
- 30) ebd. S. 108
- 31) Jonas (1987) S. 49
- 32) Jonas (1991) S. 109
- 33) Liesmann (2003) S. 55= (2008) p. 133

参考文献

- Anders, Günther (1956): *Die Antiquiertheit des Menschen 1: Über die Seele im Zeitalter der zweiten industriellen Revolution*, C.H.Beck, 2010 [1956] ((1994 a) ギュンター・アンダース『時代おくれの人間・上 第二次産業革命時代における人間の魂』青木隆嘉訳、法政大学出版局、1994年)
- Anders, Günther (1980): *Die Antiquiertheit des Menschen 2: Über die Zerstörung des Lebens im Zeitalter der dritten industriellen Revolution*, C.H.Beck, 2013 [1980] ((1994 b) ギュンター・アンダース『時代おくれの人間・下 第三次産業革命時代における生の破壊』青木隆嘉訳、法政大学出版局、1994年)

- 年)
- Anders, Günther (1990): *Sprache und Endzeit VI*. In: FORVM, Heft 433–435, 1990, SS. 17–21.
- BenGershom, Ezra (1983): “Ethical Aspects of Clinical Chemistry”, in: *Journal of Medical Ethics*, 9, 1983, pp. 207–210
- Dries, Christian (2012): *Die Welt als Vernichtungslager: Eine kritische Theorie der Moderne im Anschluss an Günther Anders, Hannah Arendt und Hans Jonas*, Transcript, 2012
- Jonas, Hans (1979): *Das Prinzip Verantwortung. Versuch einer Ethik für die technologische Zivilisation*, Insel, 2003 [1979] ((2000) ハンス・ヨナス 『責任という原理 科学技術文明のための倫理学の試み』加藤尚武監訳、東信堂、2000年)
- Jonas, Hans (1987): *Technik, Medizin und Ethik: Praxis des Prinzips Verantwortung*, Suhrkamp, 1987
- Jonas, Hans (1991): *Erkenntnis und Verantwortung*, Lamuv, 1991
- Kurreck, Jens (1994): “Primat der Furcht. Medizinische Gentechnologie und ‹Prinzip Verantwortung›”, in: Böhler, Dietrich (Hg), *Ethik für die Zukunft: Im Diskurs mit Hans Jonas*, C.H. Beck, 1994, SS. 428–454
- Liessmann, Konrad Paul (2002): *Günther Anders*, C.H.Beck, 2002
- Liessmann, Konrad Paul (2003): “Verwiflung und Verantwortung. koinzidenz und Differenz im Denken von Hans Jonas und Günther Anders”, in: Jacobson, Eric und Wiese, Christian (Hg), *Weiterwohnlichkeit der Welt: Zur Aktualität von Hans Jonas*, Philo Verlagsgesellschaft, 2003, SS. 53–70
- Liessmann, Konrad Paul (2008): “Despair and Responsibility: Affinities and Differences in the Thought of Hans Jonas and Günther Anders”, in: Tirosh-Samuelson, Hava and Wiese, Christian (Eds.), *The Legacy of Hans Jonas: Judaism and the Phenomenon of Life*, Brill Academic Publishers, 2008, pp. 131–148
- 渡名喜庸哲 (2013): 「フランスにおけるギュンター・アンダース」『国際哲学研究』東洋大学国際哲学研究センター、第2巻、2013年、pp.167–170

ENGLISH SUMMARY

Technology and Imagination:

Comparing Günther Anders and Hans Jonas' philosophies of technology

TOYA Hiroshi

The purpose of this paper is to compare the philosophies of technology proposed by Günther Anders and Hans Jonas. According to Anders, technology restricts human imagination by its all too destructive powers, causing imbalances between technology and humanity's true nature through what he calls a 'Promethean gap'. He suggests ways to address this gap by intentionally expanding upon the imagination. Jonas finds increasing danger on the process of technological civilization by the accelerative and accumulative growth and development of technology. As a result of this, he opines that technology exerts a serious impact on future generations and the range of its influence/s exceeds the ability of humans to make accurate scientific predictions. Jonas suggests that our foundations should be based on ensuring the freedom of human imagination rather than on scientific demonstrations, and on actively arousing fear in humans to thus avoid catastrophic possibilities in the future. In previous studies, the philosophies of technology by both Anders and Jonas have been equated to each other because of their similar emphasis on the human imagination. However, they are not entirely similar because their interpretations of technology and their meanings of imagination are different from each other; equating the two prevents not only the correct interpretation of each philosophy but also the understanding of human beings' relationships with technology from various points of view. This paper clearly distinguishes the philosophies of technology put

forth by Anders and Jonas and by examining both their works, it prepares a foundation upon which to evaluate their validity As a conclusion, this paper considers solutions to various problems surrounding the technology.

Key Words: Günther Anders, Hans Jonas, Philosophy of Technic, Imagination, Nuclear Weapons.